九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国人学習者対象の日本語作文訓練の試み : 訂正作業の効果

金, 宥暻
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494575

出版情報：比較社会文化研究. 15, pp.13-21, 2004-02-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第15号（2004）13～21頁
Social and Cultural Studies
No.15（2004），pp. 13～21

韓国人学習者対象の日本語作文訓練の試み
—訂正作業の効果—

金（キム）　宥暻（ユ ギョン）

Ⅰ　問題提起

本研究では、韓国人学習者が筋の通った明瞭な文を書くために必要な作文[1] 訓練方法を探る。日本語学習者が書いた日本語文は、読み手の理解度を妨げるものがある。筋の通った明瞭な日本語文を書くためには、論理関係を明確に表すことが必要である。しかし、韓国人学習者は論理関係を明確にあらわさないで言葉を羅列することが多い。そこで、韓国人学習者が文を明瞭に書くことを目標として、学習者に論理関係を意識化させるのに訂正作業はどれほど役に立つかを検証する。なお、日本語学習者には、さまざまな言語背景を持つため、まず、本研究では日本語と言語体系が非常に類似していると言われる韓国人日本語学習者を対象とする。

次の例文を参照されたい。例文は、日本語の日常会話に不自由のない韓国人が書いたものである。下線は、「語彙の間違いおよび文法的な間違いといえる部分」である。

> 済州道において農産物の交易分野を共同研究の主題に提案したのは、済州道の産業構成の中で１次産業の構成比率が36％もあり、済州道の農業は観光産業とともに済州道の地域経済の成長を主導してきたので、済州道の立地的な与件などを考慮してみるところ、済州地域経済の中枢的産業として成長、発展のための推進はやむを得ないことからである。

例文は、部分ごとに区切ってみると文法的誤りは少なく、語彙も具体的であるにも関わらず、全体の主旨が非常につかみにくい。このように、韓国人日本語学習者には、日常会話では日本語が自由に駆使できるが、学業や実務の場で必要とされる論理的で明快な文章が作成できるという人は非常に少ない（泉1993、李1990）。

論理的文章作成のための能力には、「語彙運用能力／文脈構成能力／言語形式の使い分け能力」の三つがあげられている（『運用能力獲得のための基礎日本語教育』（2000）。筆者の研究結果により、これら三つの中で「文脈構成能力」が日本語母語話者の理解度、許容度に重大な影響を与えることが示唆された（金2000　修士論文）。

韓国人学習者が「文脈構成能力」の認識が不足することには、二つの原因が考えられる。一つは、日常レベルでの韓国語と日本語の共通性に起因するのではないかと推測される。すなわち、韓国語は日常レベルのやりとりにおいて論理関係を明示せずに羅列的に言葉をつないでいくという点で日本語と共通する。そのために、明確な論述が求められる文にもそのような形式を使ってしまうのであろう。もう一つは、「接続」の認識の不正確さや接続詞の選択の間違いなどがあげられる（姫野1981、長谷川1983、矢野1983、佐藤1992、財部2001）。このような「接続」の問題が起こることには、接続語や接続形態についての理解の不足と連結されるべき個々の概念とその関連形態についての認識の不足（因・市丸1994）がある。

合わせて、作文教授法においては、接続助詞で結ばれた前接要素と後接要素が接続助詞を中心としてどのような関係で結び付けられるかが詳しく説明されなければならない（森山2001）。

韓国人日本語学習者に「文脈構成能力」を高めるためには、論理関係や文脈構造が明示されず、読み手にそれを推測することを委ねるような文章では、論述文や報告文としては不適格であると言うことを学習者がまず理解し、論理関係や文脈構造の不適切さが意思伝達を行なう上で問題になることをはっきりと認識することが必要なのである。

論理関係や文脈構造の問題に関心を向けさせるためには、多くの授業で行なわれている、「正しい例文を多く示して暗記させる」（李1990）、「日本語の接続語や接続形そのものについての説明や練習を充実させる」（市川2000）という方法では問題点を認識させるのに限界があると考える。そこで、本研究では、問題点の含まれる文やパラグラフを提示し、問題点のあるところを認識させる必要があるという考えに基づき、訂正作業を試みた。

Ⅱ　調査

1．調査目的

本調査は、訂正作業を行なうことが学習者の認識率を高めるのにどの程度影響を与えるかを観察することを目的とする。

2．被験者

被験者は、韓国の釜山にある13学部をもつ４年制大学で開設されている日本語上級クラスの学生である。今回の調査に協力を得たクラスは、全員３・４年生で構成されている。日本語上級クラスの学生（日本語能力試験１級レベル）76名である。上級クラスは、専攻に関係なく、レベルテストに合格した学習者自身の希望により構成されている。本調査では、訂正作業と学習者の認識化との関係を調べることに焦点をあてているため、被験者の資質、年齢、動機、留学経験有無、専攻による日本語使用環境など、変数となり得る要素は考慮しなかった。被験者76名は、明示グループ（38名）と対照グループ（38名）の二つに分けた。

3．調査方法

調査は、大学で設けられている授業時間に実施した。

調査は、訂正作業の効果を明らかにすべく、実験グループ、対照グループを用いて行った。実験グループは基本練習、訂正作業、訂正タスク順に、対照グループは基本練習、訂正タスク順に実験を行った（図１）。所要時間は、基本練習15分、論理関係意識化作業20分、訂正タスク40分、意識調査15分である。

〈図１〉　調査の手順

実験グループ：基本練習 → 訂正作業 → 訂正タスク

対照グループ：基本練習　　→　　訂正タスク

基本練習は、従来の教材に多く見られる穴埋めと択一問題にした（資料１）。

訂正作業としては、「教師が概念の把握や連結方法に問題点がある文を提示し、連結されるべき個々の概念とその論理関係に鑑みた連結表現の適否を学習者に判断させる」というのを被験者の母語である韓国語で行った。その内容を詳述すれば以下の通りである。

まず、「対照・対比」関係の例文を挙げると次の通りである。

> 東アジア諸国の共通的な現象であるが、韓国もまた人口高齢化の速度がたいへん急速であると予想されている。しかし、それに対応するための老人福祉制度はいまやっと始まったばかりの段階である。

例文提示後、実験グループの被験者に表現の適否を韓国語で尋ねた。次に、前項と後項の意味関係と構造関係の適否を尋ねた。また、同様の問題を韓国語で提示し、韓国語と日本語の文構造の類似点と相違点について考えさせ、例文が読み手である日本語母語話者の容認度が低いことを示した。これらの例文が容認されないのは、前項と後項の意味関係と構造関係に生じるズレが原因であることを説明した。同時に、一文を二文に分ける処理法、二文を一文にまとめる処理法も考えさせた。

「因果」関係においては、次の例文を提示した。

> 済州道において農産物の交易分野を共同研究の主題に提案したのは、済州道の産業構成の中で１次産業の構成比率が36％もあり、済州道の農業は観光産業とともに済州道の地域経済の成長を主導してきたので、済州道の立地的な与件などを考慮してみるところ、済州地域経済の中枢的産業として成長、発展のための推進はやむを得ないことからである。

例文提示後、実験グループの被験者に表現の適否を韓国語で尋ねた。次に、意味関係と構造関係の適否を尋ねた。また、同様の文を韓国語で提示し、韓国語の論理関係を考えさせた。その後、例文は結果に対して二つの理由を提示することであるが、「因果関係」の構造の枠が明瞭でないため、日本語母語話者の容認度が低いことを示した。因果関係における表現については、「原因－結果」は「～ため／ので／によって、～である（と考えられる）」、「結果－原因」は「～たのは、～からである（と考えられる）」などがあることを示した。そこで、その間違いを指摘し、日常では容認されうるが、論文になると容認されにくいため、文中で原因であることを明確に示す必要があることを説明した。同時に、一文を二文に分ける処理法、二文を一文にまとめる処理法も考えさせた。

実験グループは意識化作業後、対照グループは基本練習後、訂正タスクを行った。

訂正タスクの際には、論理関係の訂正作業の効果を訂正タスクの結果を基に観察することは示していない。その理由は、被験者が訂正タスクにおいて訂正という作業を過剰に意識することを避けるためである。

また、訂正の際には、訂正理由を韓国語で書くように指示した。その理由は、訂正の際の韓国人学習者の意識を知るため、また、母語で書くことによって負担を軽減させるためである。

また、実験グループには、論理関係意識化作業を受けたことに関する被験者の意見を知るために、意識調査を行った。

4．分析方法

分析は、「実験グループと対照グループ間の基本練習の結果」「実験グループと対照グループ間の訂正タスクの結果」の二つの項目に基づいて行なった。基本練習の結果は、正解率を基準とした。訂正タスクの結果は、被験者の認識に焦点をおいたため、訂正結果の正・不正解にかかわらず、被験者が問題点のある部分に訂正を試みた場合は、問題点への認識があるとみなし、すべて「認定」に含めだ。

Ⅲ　結果と考察

まず、基本練習においては、正解率を基準として平均得点を求めた。これは、被験者である両グループの能力の差の有無の確認と同時に基本練習を行なうことが学習者の認識率にどのくらい影響を与えるかを知るためである。

〈表1〉　基本練習の平均得点：満点50点

	対照・対比		因　果	
被験者	実　験 グループ	対　照 グループ	実　験 グループ	対　照 グループ
平均得点（M） と標準偏差(SD)	M＝32.89 SD＝8.86	M＝29.74 SD＝7.78	M＝47.63 SD＝5.35	M＝46.84 SD＝4.65

本研究の目的である論理関係意識化作業を行なう前に、実験グループと対照グループの日本語文章理解能力に違いがないことを証明するために、対照・対比および因果関係の文章理解テスト（いずれも50点満点）を実施した。その得点についてグループ間の違いを比較するためにｔ検定を行なった。その結果、まず対照・対比文について、明示グループ（ｎ＝38、M＝32.89、 SD＝8.86）と対照グループ（ｎ＝38、 M＝29.74、 SD＝7.78）の得点に有意な違いはなかった。また、同様に因果関係の文章についてもｔ検定を行なった。やはり、明示グループ（ｎ＝38、 M＝47.63、 SD＝5.35）と対照グループ（ｎ＝38、M＝46.84、 SD＝4.65）の得点に有意な違いはなかった。ただ、因果関係の文章については、満点の50点に非常に高い得点を示しているので、満点を取った被験者が多かったのではないかと思われ、天井効果の傾向が見られることを加えておく。これには、二つの要因が考えられ、一つは、おそらく因果関係の問題が簡単すぎたことである。もう一つは、一つの主題の中に含まれる対立する二つの要素を対比する場合と二つの主題を対比する場合にもちいるべき表現の知識が韓国語においても不明瞭であることである。たとえば、次の問題に対して、被験者の多数が、接続詞として「しかし」を選択している。

> 自動販売機は、人手を使わず24時間動かすことが可能で、有用な装置である。
> （しかし、そして、その反面）電力がむだに使われるという問題も指摘されている。

というのは、韓国語においても「反面、しかし」などの表現が存在するが、それらに関する表現を間違っていることから、韓国語の用法の認識も不明確ではないかと考えられるためである。これに関するもうひとつの裏づけとして、練習問題を解く際に、どういう過程を経て選択しているかというと、ほとんどの学習者が韓国語でまず考え、韓国語での表現を日本語に当てはめていくという過程を行っているためである。

いずれにしても、ｔ検定の結果は、論理関係意識化作業を行う以前の文章理解において、実験グループと対照グループに有意な違いがないことを示した。したがって、今後、実験グループの日本語学習者に対して、論理関係意識化作業を行なわせ、その効果を対照グループを基準として比較することができる。

基本練習後、実験グループのみ意識化作業を行い、その後、両グループは事後タスクとして訂正タスクを行った。

〈表２〉　訂正タスクにおける問題点に対する認定度

	対照・対比		因　果	
被験者	実　験 グループ	対　照 グループ	実　験 グループ	対　照 グループ
認定率	25名（65%）	15名（41%）	28名（73%）	12名（33%）
χ^2検定	$\chi^2=11.69$、$p<.001$		$\chi^2=34.74$、$p<.001$	

論理関係意識化作業を明示しなかった対照グループは、対照・対比文で問題点を認定できた人数は15名であり、認定できなかった人数は23名であった。一方、実験グループでは、問題点を認定できたのが25名で、認定できなかったのが13名である。ここで、この人数について、実験グループは、対照グループよりもより多くの被験者が認定できたかどうかをカイ二乗検定で調べた。その結果、実験グループは、対照グループよりも有意に多くの被験者が問題点を認定できていた（$\chi^2=11.69$、$p<.001$）。同様に、因果関係の文でも、実験グループの被験者は、対照グループの被験者よりも、より多くの人が因果文の問題点を認定していた（$\chi^2=34.74$、$p<.001$）。したがって、論理関係意識化作業によって、上級の韓国人日本語学習者は、作業を行わなかった学習者よりも、より敏感に問題点を指摘できたことになる。すなわち、論理関係意識化作業が文の理解に貢

献していたことが証明された。

今回の調査では、訂正を行なう際の意識を知るために、被験者に基本練習においても訂正タスクにおいても韓国語で理由を書くことを求めた。基本練習と訂正タスクにおける学習者の意識を観察した結果は〈表３〉である。本調査の対象は、対照・対比関係、因果関係であることから、これと関連する指摘をしたものを意識率に含めた。

〈表３〉　訂正過程にみられる被験者の意識

	対照・対比		因　果	
被験者	実　験 グループ	対　照 グループ	実　験 グループ	対　照 グループ
意識率	14名 （38%）	４名 （13%）	11名 （27%）	0
χ^2検定	$\chi^2=11.31$、$p<.001$			

論理関係意識化作業を明示しなかった対照グループは、対照・対比文において問題点を訂正する過程に線を引いたり具体的な説明をつけたりし、明示的な意識が観察された人数は４名であり、意識が観察されなかった人数は34名であった。一方、実験グループでは、訂正を行う過程で意識が観察されたのが14名で、観察されなかったのが24名である。ここで、この人数について、実験グループは、対照グループよりもより多くの被験者において意識が観察されたかどうかをカイ二乗検定で調べた。その結果、実験グループは、対照グループよりも有意に多くの被験者が問題点を意識していた（$\chi^2=11.31$、$p<.001$）。また、因果関係の文においては、０人のセルがあるので分析はできない。しかし、実験グループは、対照グループの被験者よりも、より多くの人が因果文の問題点を意識的に指摘していたと言えよう。

さらに、実験グループには授業後、論理関係意識化作業に関する意見を求めたところ（資料３）、作文授業に論理関係を意識化する訓練は必要であるという意見が得られた（資料４）。

以上のことから、韓国人学習者に対する作文における論理関係意識化の方法として、「概念の把握や連結方法に問題点がある文を示し、連結されるべき個々の概念をその論理関係に鑑みて連結表現の適否を判断させる」という作業は有効であることが示唆された。

Ⅳ　まとめ

本研究は、訂正作業が学習者の認識の向上につながるかを知るための調査を行い、以下の発見をした。

① 実験グループと対照グループ間の訂正タスクの認識率を観察した結果、実験グループにおいて有意差が観察された。

② 実験グループにおいては、対照グループに比べ訂正テストの際に具体的に文章間の関係を示す具体的な意識が観察された。

③ 実験グループに対して、意識化作業に関する意見を求めた結果、作文授業に論理関係を意識化する訓練は必要であるという意見が得られた。

調査結果から、韓国人学習者に対する日本語作文教育では、訂正作業を行なうことが、作文能力向上に効果があるという指針を得た。この指針を基に、次は訂正作業の具体的過程の提示と方法を考案したい。また、今回は意識化授業の効果を判断する事後タスクとして訂正テストのみを用いた。しかし、意識化作業の効果に対するより高い信頼を得るためには、事後タスクの精密化は必然的であると考える。このことも次の課題とする。

資　料

≪資料１≫基本練習

調査後、本調査についておたずねすることがあるかも知れませんので、お名前と連絡先を教えてください。

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　電話番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

メールアドレス＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ⅰ．２つの文の関係を考えて、(　　)の中から最も適当なものを選んでください。

1．人間と動物の違いを言うと、人間は言語を用いて情報を伝達することができる（　反面　一方　　かわりに　）、動物はできない。

2．テレビが情報を映像で伝える（　のに対して　反面　し　）、ラジオは音声で伝える。

3．自動販売機は、人手を使わず24時間動かすことが可能で、有用な装置である。（　しかし　そして　その反面　）電力がむだに使われるという問題も指摘されている。

Ⅱ．次の＿＿＿＿＿に適当な語句を下から選んでください。また、該当する語句を選んだ理由を書いてください。

1．前回とすべて同じ条件で実験をした。＿＿＿＿＿、前回と大きく違う結果が出た。
〔理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕

2．タバコは有害であるとすでに証明されている。＿＿＿＿＿、日本ではまだタバコを吸う人がへらない。病院内でタバコを吸っている医者もいる。
〔理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕

しかし　　一方　　反面　　これに対して

Ⅲ．　次の問題と同じ意味の文を選んでください。

1．大量生産が可能になった要因のひとつとして、機械化が挙げられる。
　a．機械化が大量生産を可能にした。
　b．大量生産が機械化を可能にした。
　c．機械化の原因は、大量生産である。

2．機械の誤作動が大規模な事故につながったと考える。
　a．機械が正しく作動しなかった要因は、大規模な事故が起こったことにある。
　b．機械が正しく作動しなかったので、大規模な事故が起こった。
　c．大規模な事故が起こったから、機械が正しく作動しなかった。

Ⅳ．次の＿＿＿＿＿に適当な語句を下から選んでください。また、該当する語句を選んだ理由を書いてください。

1．都市に人口が集中するようになった。＿＿＿＿＿、都市では就職の機会が多く、かつ、生活が便利なためであろう。
〔理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕

2．1996年、O－157による食中毒が流行した。＿＿＿、この年は野菜の消費量が少なかった。
〔理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕

3．自動車運転中に携帯電話に気を取られて事故を起こすケースが増えた。＿＿＿＿＿、警察は運転中の電話を止めるよう指導している。＿＿＿＿＿、運転しながら電話している人を見かけなくなった。
〔理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕

その理由は	このことから	というのは	そのために	その結果

≪資料2≫訂正タスク

まずお名前とご連絡先をお書きください。

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　**電話番号**＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

メールアドレス＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

次の文はこのまま使ってもいいと思いますか。不自然であると思いますか。もし、不自然であると思うところがあれば訂正してください。一つの文が長いと思われれば文を分けてもいいし、文の順序を変えてもかまいません。また、訂正を行う際には必ず訂正理由を書いてください。理由は韓国語で書いてもかまいません。

①人間の脳とコンピュータは、両方ともネットワークでできている。②しかし、人間の脳とコンピュータは、よくできる分野が違うのに、それは、人間の脳は、顔を見たときに、その顔の特徴をすぐ覚えていて、別の人の顔とどんな風に違うか記憶していて、コンピュータは、計算を短い時間にする。

①本稿では、韓国の水産加工業の対策を考察する。②国内において食生活の変化、生活パターンの変化などで水産加工品の需要が減少していて新しい生活パターンに合う新製品の開発で需要を復帰させることが必要である。③そして、輸出市場においては、需要者の嗜好に合う製品生産が微々としたことなどで、輸出市場の確保に障害をもっていて、それに応じることが必要である。

≪資料3≫意識調査

次の質問にお答えください。

1．今まで論文やレポートを書くための作文教育に関する授業を受けたことがありますか。
ある　　ない
「ある」と答えた方に質問いたします。
その作文授業はどんな内容でしたか。
①長い論文の要約をする
②論文を読んで、質問に対する答えを書く
③あるテーマが与えられて自由に書く
④韓国語を日本語に翻訳する
⑤その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2.「1」で「ある」と答えた方に質問します。
今日の授業は、今まで受けた作文教育と違うところがありますか。
はい　　いいえ
「はい」と答えた方は、今まで受けた作文教育との違いについて具体的にお書きください。

_____

3. 論理関係意識化作業は、やってみて役に立ったと思いますか。
はい　　いいえ　　よくわからない
「はい」に○をつけた方におたずねします。
具体的に、どういう点に役に立ったと思いますか。_____

「いいえ」に○をつけた方におたずねします。その理由は何ですか。_____

4. もし、機会があったら、論理関係意識化作業を行う授業を受けたいと思いますか。
はい　　いいえ

5. 他に、論文やレポートを書くための授業に関するご意見があれば、お書きください。

_____

≪資料4≫　明示グループに対する意識調査の結果

調査項目	回答結果
1. 今まで論文やレポートを書くための作文教育に関する授業を受けたことがありますか。	ある（5） ない（32）
「ある」と答えた方に質問いたします。その作文授業はどんな内容でしたか。	①長い論文の要約をする（1） ②論文を読んで、質問に対する答えを書く（1） ③あるテーマが与えられて自由に書く ④韓国語を日本語に翻訳する（1） ⑤その他（2）（論文書き、「論文書き」という本から用例を習う授業）
2.「1」で「ある」と答えた方に質問します。今日の授業は、今まで受けた作文教育と違うところがありますか。	はい（5）　　いいえ（0）
「はい」と答えた方は、今まで受けた作文教育との違いについて具体的に書いてください。	・文章間の機能を示してくれたこと ・以前受けた授業では、意味的な面を中心としたが、今日の授業は、構造的な面まで触れてくれた。 ・今までは、日本人の先生に授業をうけてきたが、日本語と韓国語と微妙な差については説明してもらえなかった。今日の授業は、このようなことを指摘してくれた。だから、単純な会話でない、論文などを書くための作文は韓国人の指導を受けたほうがよいと思った。

調査項目	回答結果
「はい」と答えた方は、今まで受けた作文教育との違いについて具体的に書いてください。	・今までは、文章の性質について考えていなかった。接続詞や副詞について、あまり考えずに使っていた。 ・接続詞の微妙な差が分かった。 ・全体的な流れを考えさせる授業であった。 ・今までは、韓国語を日本語に翻訳するときに必要な単語や語句だけを覚えてきた。しかし、今日の授業を受けて文章間の関係を考えた上で書く必要があることが分かった。
3．訂正作業は、やってみて役に立ったと思いますか。	はい（32） いいえ（1） よくわからない（3）
「はい」に○をつけた方におたずねします。具体的に、何が役に立ったと思いますか。 「いいえ」に○をつけた方におたずねします。その理由は何ですか。	・意味伝達力の高い文章を書くことにつながる。 ・韓国人特有の問題が把握できる。 ・日本語文を分析する力がつく。 ・韓国人の日本語を分析することによって同類の間違いを侵す確率が低くなると考える。 ・今まで教科書の文章だけを見てきたので、実際に文を書くことにつながらなかったと思う。 ・自分が書いた文章の分析より他人の間違えた文を見ることにより、文中の間違いに気づくことができる。このようなことをすることによって、作文能力の向上につながると考える。 ・従来の文法書の学習より自分が書いた作文中の誤用を正しく直す学習が役に立つと思う。 ・今までは、ほとんど直感で書いたが、今日の授業を受けてみて論理的に考えるようになった。
4．もし、機会があったら、訂正作業を行う授業を受けたいと思いますか。	はい（33） いいえ（4）
5．他に、論文やレポートを書くための授業に関するご意見があれば、お聞かせください。	・日本語と韓国語は類似している点が多いため、その差を習いたい。 ・微妙な違いがある単語、接続語を習いたい。 ・たくさん書き、訂正を行なう授業を受けたい。 ・国語文法と並行した授業を受けたい。 ・誤用分析を入門段階から行なってほしい。 ・論文のための文型をならいたい。 ・韓国語と比較しながら、日本語特有の文体、文章構成などの授業が開設されてほしい。 ・作文授業中に読解もしたい。

【参考文献】

・金谷憲編著（1992）『学習文法論』桐原書店
・基礎日本語教育研究プロジェクトチーム『運用能力獲得のための基礎日本語教育』（2000）財団法人日本語教育振興協会
・岩淵悦太郎編著（1960）『悪文』日本評論社
・岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠弘己（1992）『ケーススタディ日本語教育』おうふう
・姫野昌子（1981）「文章表現の指導」『日本語教育』43号
・矢野安剛（1983）「文を超える文法」『日本語学』第２巻２号、明治書院
・長谷川恒雄（1983）「作文指導の一試行」『日本語と日本語教育』12号、慶応義塾大学日本語日本文化教育センター
・李鳳姫（1990）「上級の日本語教育－韓国人学習者の場合」『日本語教育』71号
・重松淳（1990）「留学生に対する「書く」ことの指導について」
・佐藤勢紀子（1992）「論文作成をめざす作文指導－目的に応じた教材の利用法－」『日本語教育』79号
・泉文明（1993）「韓国語話者の日本語語用例の分析」『日語教育』第９号
・因京子・市丸恭子(1994)「作文訂正にみる学習者の自己訂正意識」
『九州大学留学生センター紀要』第6号
・財部仁子（2001）「作文における接続語句のレベル別問題点」『日本語・日本文化研究』大阪外国語大学日本語講座
・森山新（2001）「韓国語母語話者の日本語発話に現れた誤用分析」『外国語教育』（韓国外国語学会）
・Heidi Dulay・Marina Burt・Stephen Krashen／牧野高吉訳（1984）『第2言語の習得』弓書房
・Rod Ellis(1997) *Second Language Acquisition*、 Oxford University Press.
・Stephen D. Krashen、 Tracy D. Terrell(1983) *The Natural Approach*、 Prentice Hall.
・Burt、 M. K (1975) Error Analysis in the Adult EFL Classroom.
TESOL Quarterly 、 Vol. 9、 No. 1、 53-63
・Gillian Brown (1996) Language learning、 competence and performance、 *Performance & Competence in Second Language Acquisition*、 Cambridge University Press、 187-203
・Buckingham、 T & Pech、 W. C (1976) An Experience Approach to
Teaching Composition、 *TESOL Quarterly*、 Vol.10、 No.1、 55-65.
・Scott、 Virginia M.(1989) An empirical study of explicit and implicit teaching strategies in French、 *Modern Language Journal*. 73、 1、 14-22.

---

(1) 本研究では、演説・発表・公文書など、公開されることが前提となるものを便宜上、作文または書き言葉とする。